

仏教・真宗の生命観 ～人権・平和論への一視座～

高田文英（龍谷大学）

【発表要旨】

この度の日本仏教学会では、「仏教が語る「人間」は、現代社会や現代人にとってどんな道筋を提示できるのだろうか」（テーマ趣旨より）とあるごとく、とくに仏教と現代社会との関わりが問われているが、発表者はこれまで、こうした問題を正面から学究の対象としたことはなかった。

しかしここ数年、龍谷大学の実践真宗学研究科の開講科目である「人権平和論研究」を担当し、不十分ながらも、人権や平和などの社会的な問題と仏教・真宗との関わりについて考える機会を得た。人権・平和に関する諸問題は、政治・経済・文化などの多様な要因の絡み合う、複雑な問題であるが、これを仏教・真宗の立場から考えるならば、その基底には、自己の都合のみを優先させる態度や、他者への無関心といった我々のものの見方、すなわち自己と他者に対する認識の問題が横たわっていることが指摘されるであろう。

本発表は、かかる問題意識から、仏教なかでも真宗の立場からの生命観とそこから導かれる対人関係のあり方を考えるものであり、これにより、社会的な問題に向き合う上での、真宗者としての基本的な視座を明らかにしたい。

具体的には、『末灯鈔』第二通「あはれみをなし、かなしむこゝろをもつべし」（『浄土真宗聖典全書二』七八二頁）、『唯信鈔文意』「いし・かはら・つぶてのごとくなるわれらなり」（『同』六九九頁）、『歎異抄』第五条「一切の有情はみなもて世々生々の父母・兄弟なり」（『同』一〇五六頁）などの文を通し、親鸞の上に見られる生命観あるいは対人関係論を中心に考察を行う。

結論として、真宗の生命観は、「自他不二」「悉有仏性」などの語であらわされるような、煩惱を離れた聖者のみが覚知しうる真理を直接のより処とするのではなく、むしろ、念仏の信心を通して凡夫の上にも実感される生命観であるところに特徴があり、それは「罪悪深重」「輪廻無窮」などの語であらわされる、言わば生命の抱えている悲しさをその本質とするものであることを指摘する。

そして、こうした迷いの中にあるお互いであり、互いに難しいものを抱えているという生命観から導出される「他者の痛みへの共感」、「同類相哀れむ」という精神こそ、真宗者が現代社会の諸問題に向き合う上で、基本的な視座とすべきものであることを論じたい。

キーワード：真宗 生命観 人権 平和